

<調査報告>

OCP 学生スタッフの取り組み

— 立ち上げから現在まで —

金久保紀子*・馬場 裕**

A Report on the Performance of OCP Student Staff

KANAKUBO Noriko * and BABA Hiroshi **

Abstract

This report presents an overview of circumstances of an organization of OCP student staff from beginning to now. The report also aims to obtain a guideline of OCP activity from now on, by reviewing a background of putting up of OCP student staff, how OCP student staff was organized and then recognized on and off campus, and what OCP student staff has done. From the results of a survey about OCP conducted among all students, it was confirmed OCP is, on the whole, successful.

はじめに

筑波学院大学では平成17年度の改組・改編と同時に「社会力」の育成を教育目標に掲げ、「オフ・キャンパス・プログラム」(Off Campus Program 以下 OCP) に取り組んでいる。活動範囲を大学のみならず、つくば市全体をキャンパスにして、様々な社会参加活動を学生が行い、大学生であると同時に、社会の一員として必要な力を育てていくことを目的とした教育プログラムである¹⁾。

OCP スタートから2年目の平成18年には、活動の「主役」である学生の視点を積極的にプログラムに盛り込んでいくことを目的して

「OCP 学生スタッフ」が組織された。

OCP 学生スタッフは現在25名の筑波学院大学学生で構成されており、OCP における企画・運営の一部に学生の立場から関わっている。

本稿では、OCP 学生スタッフの立ち上げの経緯から現在までの主な活動を振り返り、整理する。また、平成18年度に OCP 学生スタッフが行った「OCP 意識調査」の結果を考察し、今後の OCP における OCP 学生スタッフの役割を明らかにしていくことを目的とする。

* 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

** 国際交流学科3年、Tsukuba Gakuin University

1. OCP 学生スタッフについて

OCP 学生スタッフは、OCP に学生の視点を盛り込むことを目的に組織された。筑波学院大学全体の学生自治組織である「学友会」や、部活動・サークル等、従来の学生組織の一部ではなく、OCP に活動の基盤をおいた新しい学生組織である。

OCP 学生スタッフは現在25名の筑波学院大学学生で構成されている。同25名は OCP 推進室²⁾統括のもと、企画・運営チーム、コーディネートチーム、広報チームの3チームで編成され、OCP の企画・運営の一部に学生の立場から関わっている。各チームは、チームリーダーとサブリーダーを選出し、また、チーム担当アドバイザーとして社会力コーディネーター³⁾及び OCP 推進室担当教員が各チーム運営に参加している。

活動は基本的にチーム単位で行われているのだが、各自が得意な、興味のある分野に属しているという程度のゆるい枠組みであって、チーム間に明白な境界線があるわけではなく、フレキシブルに意見や提案がなされる。

月に2回、各チームリーダー、サブリーダー、担当アドバイザーによって「リーダー会議」が行われ OCP 学生スタッフの活動計画が話し合われる。そこでの決定事項をリーダーがそれぞれチームに持ち帰り、チームミーティングの中で全員にフィードバックを行う。また各チーム内で出される新しい意見や提案は次のリーダー会議の議題となる、という循環がなされている。他に全体会を年に2回ほど行っているが、そこでは OCP 学生スタッフ全体の活動方針（ミッション）を再確認し、お互いに活動への意欲を高めることに重点を置いている。このようにミーティングを細分化することで時間調整などの負担を減らすことができ、昼休みなどを利用しての短い時間で有意義なミーティングが可能に

なっている。

2. OCP 学生スタッフ立ち上げまでの経緯

平成18年10月、27名の学生が学長から委嘱を受け、第1期の OCP 学生スタッフとして活動をスタートした。ここでは平成17年の OCP のスタートから OCP 学生スタッフ立ち上げまでの1年間の経緯を整理する。

「社会力」の育成を目的とする OCP は、画一的な教育プログラムではない。学生が自ら必要な情報を選び出し、それに基づき社会参加活動を体験しながら、自分に必要なプログラムを組み立てていく、大学と学生の共同作業による個別対応の教育プログラムである。

OCP スタート当初から、活動の「主役」である学生の視点をどのようにプログラムに取り入れていくのかということはひとつの大きな課題であった。

平成17年 OCP スタートと同時に着任した社会力コーディネーターが、専門であるスポーツマネジメント・コーチング論に照らしたアイデアを提案し、その課題を解消していく。「チーム（学生）全体をリーダーで引き上げていく、リーダーがチーム（学生）とコーチ（大学）の連結役となる」という構図が OCP に当てはめられた。そして、リーダー役の学生がプログラムの企画・運営に参加し、将来的にはプログラムそのものが学生によって企画・運営されているということも視野に入れ、「OCP 学生スタッフ」の立ち上げが計画された。これは、平成18年7月に行われた現代 GP 採択の文部科学省によるヒアリングにおいても、プログラムへの学生の関わりという点で高く評価された。

平成18年6月頃に行われた学生スタッフの募集にあたっては、構内掲示板に募集要項を掲示しての学内公募をすることから始まった。しかし、そもそも学生のニーズによって

作られたプログラムではないということと、具体的な役割のビジョンが見えにくかったために学生の認知度は低いままであった。そこで、社会力コーディネーターと OCP 推進室担当教員による“声かけ”が積極的に行われ、さらに担任推薦として各クラスから 2 名程の候補者を選出する運びとなった。候補者は社会力コーディネーターと面接を行い、最終的な本人の意思確認、提案や要望、将来の展望などが話し合われ計 27 名が学生スタッフとして選出された。

この時点で筑波学院大学としての第一期生は 2 年生であり、実践科目 B⁴⁾の活動をすでに終えていた学生も多かった。そして実践科目の活動を「やってみたら意外とおもしろかった」という声が多数を占め、それは 1 年生にも大きな影響を与える可能性があった。一方、当時の最上級生の 4 年生からは「自分達もやってみなかった」との声があがり、学生達は OCP が自分達の考えていた以上に有意義であることを実感し始めた時期であった。そしてそれは学生スタッフにとっても自分達の存在価値の重要性に結びつく大きな要因でもあった。

3. 学生スタッフ活動内容

OCP 学生スタッフは、企画・運営チーム、コーディネートチーム、広報チームの 3 チームで構成されている。

3 つのチームは OCP 学生スタッフの組織の柱ではあるが、チーム間に明確な境界線があるわけではない。より細かい作業が必要な活動や課題に対しては、各チームを「縦」と考え、課題や状況に応じてチームの枠を超えて「横」方向にいくつかのワーキンググループを作ることで対応がなされている場合もある。

学生にとってもこのような形態での活動は非常に斬新である。組織に属する人間が全員

同じ能力を身に付けていくボトムアップ方式ではなく、自分の得意なことが組織の影響に直に反映していくことを感じられるので、「何かしたいけれど、自分には何ができるのだろうか」と考えている学生のモチベーションを高めていくことに繋がっていく。

3. 1 3 チームの活動内容

各チームの構成と、具体的な活動内容は以下のとおりである⁵⁾。

企画・運営チーム 3 年生：4 名 2 年生：3 名

担当アドバイザー 西機真（社会力コーディネーター）

- 学生の意見を反映させたプログラムの企画・運営・実行
- OCP 活動をしやすい環境づくり
- OCP に対する学生の意識調査

全学生対象の OCP 意識調査アンケートの実施や、学生へのヒアリング活動や行い、OCP の改善案や新しい企画の作成などを行っている。また必要とされるスキルを磨くために、「企画を立てる」「実施計画を立てる」などテーマにワークショップや勉強会を行っている。

コーディネートチーム 3 年生：3 名 2 年生：6 名

担当アドバイザー 武田直樹（社会力コーディネーター）

- 受け入れ協力団体⁶⁾での研修
- 受け入れ協力団体へのインタビュー
- 受け入れ協力団体の情報を学生の言葉でまとめ整理する。

現在までに約 15 の受け入れ協力団体での研修及びヒアリング活動を行っている。今後は研修の経験と収集した情報を活用して社会力コーディネーターの実質的なサポートも行っていく。

広報チーム 3年生：6名 2年生：2名
 担当アドバイザー 金久保紀子（OCP推進室
 担当教員）

- 新聞等の広報機関でのOCP学生報告記事の連載
- 学内掲示板での情報提供
- ポスター等の広報印刷物の作成・管理
- ホームページ運営（未遂行）

OCPにおける学生の活動報告を地元新聞に連載している。（平成19年10月現在、26回）また学内に向けてOCP専用掲示板を利用して関連情報の提供を行っていると共に、オープンキャンパスなどで大学に訪れる高校生や外部の人にOCPの知ってもらうための説明図やポスターなどの製作も行っている。OCP学生スタッフホームページの立ち上げも現在計画中である。

3. 2 ワーキンググループ

活動内容に応じてはチームを横断してワーキンググループ（作業部会）を作る事で、細かい作業に対応し成果をあげている。

平成19年7月に筑波学院大学で開催された現代GP・公開フォーラムでは、フォーラム後の交流会をOCP学生スタッフで企画立案・実施した。このときはチームごとの活動ではなく、交流会実施にあたって必要な役割をチームを横断しての4～5人を1グループとする以下の5つのグループに分担した。（図1参照）

チームの枠にとらわれないので、自由度が高く、各グループが作業に集中することができた。また個人の参加の度合いが高く、お互いを刺激し合いながら結果的には学生スタッフが一丸となって取り組んだという達成感を得ることができた。

- ①企画
交流会のプログラム企画と進行を行う。
- ②総務
交流会実施予算案の作成及び、実施費用の管理、会場設定、渉外などを行う。
- ③展示
活動紹介をするポスターセッションのためのパネル作成、及び展示の準備を行う。

現代GP・フォーラム交流会実施の場合



図1 OCP学生スタッフ 組織概念図

④ OCP プロモーションビデオ作成

学生の活動写真やインタビューを交えた OCP を紹介する映像を自主作成する。

⑤ OCP 学生スタッフロゴ作成

OCP 学生スタッフのロゴを作成し、それを使った学生スタッフ用のポロシャツをつくる。

3. 3 OCP 学生スタッフの自己研修会

これまでに OCP 学生スタッフの全体活動として、自己研修会を 3 回行っている。研修会は、お互いをよく知り意見を出し合うことで、OCP 学生スタッフ全体の活動目標（ミッション）を再確認することを目的としている。

●平成19年2月 筑波大学の野外施設を利用してのチームビルディング研修

筑波大学内の野外施設を利用してチームビルディング研修会が行われた。筑波大学野外運動研究室の指導・協力の下、野外施設に設置されたアスレチック的な要素の高い課題を、チームでクリアしていくことでコミュニケーション能力と、チームビルディング能力を高めていく研修会であった。ここでは早さを競い合うのではなく、課題を達成する過程でのチーム全員の協力と共同作業が重視される。開始前に非常に心細そうにしていた下級生達だが、僅か1時間ほどの研修で上級生と打ち解けあい、課題達成を喜んでいる姿がみられた。「短い時間ですぐに仲良くなれた」との声が多く聞かれ、お互いの距離が急速に縮まったことを実感できた。現在の学生スタッフ間の学科や学年を超えた関係は、この研修会を通して確立されたことが多い。

●平成19年3月・10月 OCP 学生スタッフの活動を考えるワークショップ（2回） NPO 法人つくば市市民活動推進機構（つ

くばEPO）協力の下、OCP 学生スタッフのあり方を考えるワークショップが行われた。OCP における OCP 学生スタッフの役割にはどんなことがあるか、また OCP 学生スタッフには何が求められているのかなどをテーマに、学年や学科を越えて様々な意見交換がなされた。それをもとに、プレスト法⁷⁾や KJ 法⁸⁾によって導き出された結論から、参加者全員が同じ目標を共有することができた。白浜青年自然の家（3月）や、つくば市民活動センター（10月）など、いつもとは違う環境で話し合いをしたことも、参加者全員が積極的に議論できた大きな要因であった。自分は消極的だと思っていた学生が、しっかりと自分の意見を話すことが出来たりと自己発見の場ともなった。

3. 4 その他の活動

OCP 学生スタッフの自主研修として、学生スタッフの有志が平成19年6月と8月に常陸太田市で行われた「茨城県青年赤十字奉仕団リーダー養成研修会」に参加した。県内の大学・短大の青年赤十字奉仕団員対象の研修会に特別に許可を得て参加したものである。

OCP はボランティア活動と混同して捉えられることがあるが、実質的には性質の異なるものである。この研修会を通してボランティアの理念と実際の活動を体験できたことにより、その相異をはっきりと実感し、OCP の概念をより深く理解することができた。また、社会参加活動という点において、他大学の学生と交流ができたことは、とても大きな収穫であった。

4. 実践科目全学生対象の意識調査アンケート

平成18年12月に情報コミュニケーション学部の2年生に対して、企画・運営チームが中

心となり、OCP 学生スタッフが作成したアンケートによる実践科目 B 活動終了後の意識調査が行われた。平成19年 1 月には情報コミュニケーション学部の 1 年生に対して、実践科目 A 活動終了後の同意識調査が行われた。一ヶ月の期間差があるのは、活動期間が長く判断材料が多い 2 年生から調査を行い、返答の傾向などから 1 年生の活動に対応した調査項目を精査し、アンケートを新たに作成したためである。変更は、記述式の質問の改良が中心で、基本的な質問項目はほぼ同じである。

このアンケート調査のねらいは、①実践科目から学生は何を学んだのか、②また今後どんなことを OCP に期待しているのか、を明確にし、それに対して OCP 学生スタッフはどのような対応ができるのかということを導き出すことに設定された。

4. 1 アンケート調査のあらまし

調査対象：筑波学院大学 1 年生・2 年生
(実践科目 A・B 履修者)

調査時期：平成18年12月(2 年生)・平成19年 1 月(1 年生)

調査方法：実践科目クラス授業時に担任より調査票を配布し、授業内に記入、担任による回収後、OCP 推進室にて学生スタッフが集計を行った。

授業欠席者については追跡しての調査は行っていない。

調査事項：学生スタッフと社会力コーディネーターによる会議を通して質問事項を選定し、調査票を作成した。選択式、記述式からなる。

(資料 1)

主な調査事項は次の通りである。

- 1) 実践科目について
- 2) OCP・実践科目以外の学外活動について
- 3) 今後 OCP で取り入れてほしいプログラ

ムについて

4) 実践科目を行う上での不安事項について

5) 自由記述

調査票回収率：

1 年生 調査対象者207名中160名から回答が得られた。回収率77%

2 年生 調査対象者222名中98名から回答が得られた。回収率44%

4. 2 調査結果

実践科目について (図 2～4)

実践科目の活動については69%の回答者が「楽しかったし何か得たものがあった」(48%)「楽しくはなかったが何か得られた」(21%)と好意的な評価をしている。また「つまらなかったし何もプラスにならなかった」(15%)「楽しかったが自分のプラスにならなかった」(12%)と否定的な評価は27%であった。(図 2)

活動を選んだ理由については、①興味があって(29%)②楽しそう(27%)③友達と一緒にだから(20%)の順に回答が得られた。(図 3)

活動を通して得たものについては、①人とのつながり(コミュニケーション)(50%)②実績・経験(23%)③知識・技術(13%)の順で回答が得られた。(図 4)

OCP・実践科目以外の課外活動について

学外活動をしていると回答した学生は52%であり、アルバイトが最も多かった。その他にボランティア、インターンシップ、学外のクラブ・サークルなどの回答があった。

学生の約半数がアルバイトをしていることがわかる。

今後 OCP で取り入れてほしいプログラムについて

記述式のため様々な回答を得ることができたが、情報メディア学科の学生にコンピュー

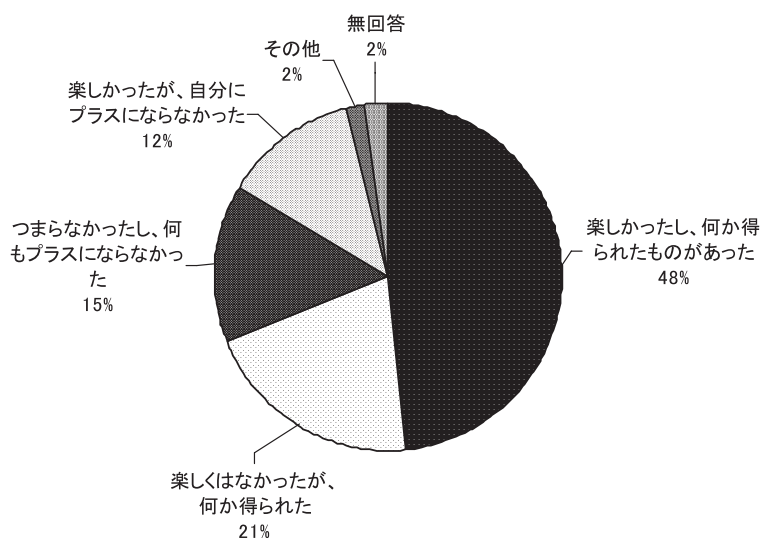


図2 実践科目をどのように感じたか

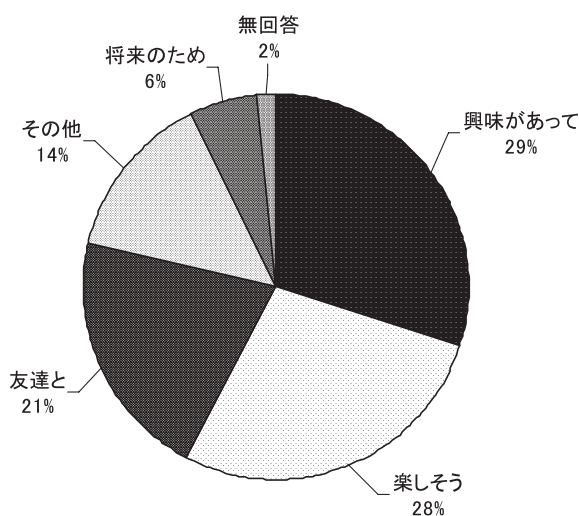


図3 活動を選んだ理由

ター関連や、情報処理関連のプログラムの充実を希望する回答が多いことに対し、国際交流学科の学生は海外ボランティア、国際交流関係、観光関係のプログラムの充実を希望する回答が多く、学科色が顕著に表れる結果となった。

実践科目を行う上での不安事項について

記述式回答の結果、交通費などの出費に関する不安が最も多く、他に、活動時間が他の授業と重なること、新しい人間関係に対しての不安などの意見が出された。

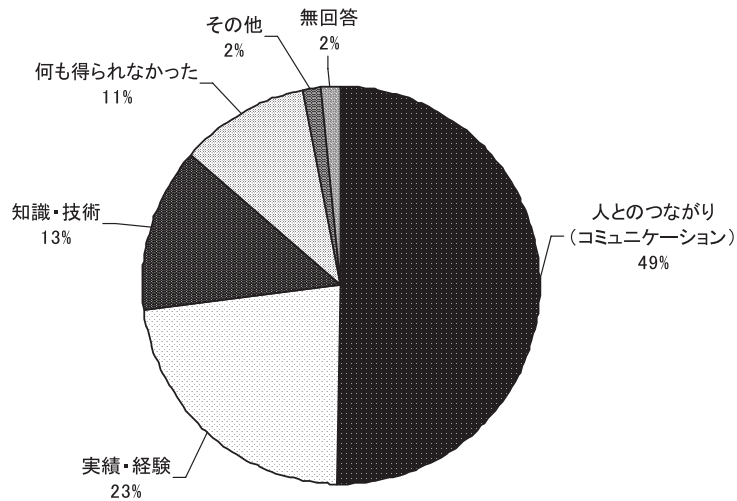


図 4 活動を通して得られたもの

4. 3 考察

全体的に楽しかった、何か得られたという回答が多く、一定の達成感を得られていることが分かった。さらに細かい分析と傾向を探る手がかりとして「実践科目をどのように感じたか」(1-A)と「活動を選んだ理由」(1-B)の関係性について着目した。両項目の回答をクロス集計し得られた結果として、「楽しそう」、「友達と一緒にだから」と回答した学生に「何も得られなかった」と回答する傾向が高いことが分かった。これは、「自分の意思で参加した活動でない」と得るものが少ない」という実感と、また「楽なこと、楽しいこと」と「ためになること」は必ずしも直結するものではないという意識が、学生に浸透していることを示していると考えられる。

1年生が、自分たちより先に活動を始めている2年生の活動内容に非常に興味をもっていることが自由記述からもうかがえ、次年度の実践科目Bの活動を選ぶにあたって、実際に体験した者の感想を参考にし、アドバイスなどをもらい自分の活動の充実につなげていきたいとする姿勢が見られた。

他にも肯定的、否定的なものを含む様々な

意見・要望が自由記述から得られた。アンケート調査に対して、学生は非常に協力的であり、そこからも OCP に対する学生の関心の高さがうかがえる。回答の一部を列記する。

肯定的

- 普段関われない人とのコミュニケーションがとれる
- 自分の興味のあることを発見できる
- 地域とのネットワークが作れる
- 授業では得られない何かを得られる
- 将来につながる

否定的

- しくみがよく分からない、目的をもっと詳しく説明してほしい
- 社会参加はアルバイトですればいいと思う
- ボランティアを強制的にやらされている
- 必修科目であるのはおかしい
- 交通費など金銭的な負担が多い

今回の調査で得る事のできた傾向の裏付けや、新たな傾向を探るためにも、同調査は毎年継続して行っていく必要がある。また今年

度は3年生が実践科目Cの活動を終えることも踏まえ、各学年に対応するアンケートの作成、また学年別の傾向を反映することのできる集計方法の検討も必要とされる。

5. 今後の可能性と役割

前節の調査結果から、次の3点がOCP学生スタッフの役割として再確認できた。

- ①活動の目的や意義を学生の言葉で学生に伝える環境をつくること。
- ②これから活動を行う学生がすでに活動を体験した学生から情報やアドバイスももらえる環境をつくること。
- ③学生が意欲的に活動に取り組むための情報交換を行える環境を作ること。

これに対して、OCP学生スタッフの間でいくつかの具体的な活動が計画・検討されている。

一つ目は、同じ分野で活動をした学生同士で実践科目終了後の“ふりかえりのディスカッション”を企画し、そのコーディネートとディスカッション記録の作成をしていくことである。この場合、学年差のある学生同士での活動を考えている。実践科目を終え一年間経った学生と、終えたばかりの学生とでふりかえりを行うことで、実践科目での体験、考え方の変化や、今後の進路にどのように役立っていくのかをお互いに確認することができる。また、学年差があることで接点がなかった学生同士が、実践科目を通じて知り合うことができる場になることも期待できる。

二つ目に、実践科目での学生の活動紹介や、受け入れ協力団体の情報などを掲載した定期的な学内広報誌の発行、また学生活動発表会、優秀活動の表彰会の開催を考えている。活動を終えた学生にとって最も嬉しいことは、自分が行ってきた活動に共感してくれる人がいることである。実際に活動した者にはか感じることでできない達成感を多くの人

と共有するためにも、より多くの発表の場が必要であると考えている。

三つ目として、学生スタッフが、それぞれの下級生の実践科目の授業に、担任教員のアシスタントとして参加する「Student Assistant（スチューデント・アシスタント）制度」である。これは、実際に社会参加活動を行ってきた学生が授業に加わることで、これから社会参加活動を行う学生により刺激を与え、よりはっきりとした活動目標をたてる上での手助けになることを目標としている。また、活動を始めるにあたっての疑問や不安などがあっても、実際の体験に基づく適切なアドバイスが受けることができる。これはアシスタントとして参加する学生にとっても、自分が行ってきた活動を振り返るよい機会にもなる。

最後に、地域の社会参加活動に関わる様々な人が、情報交換や意見交流をすることのできるサロンやカフェを筑波学院大学に将来併設し、OCP学生スタッフが運営をしていく、という夢のような夢ではあるが、真剣に実現を目指している構想がある。

6. 課題

OCP学生スタッフの活動の方向性が明確になってきた一方で、課題として挙げられることも多い。

●情報の共有

ミーティングを細分化することで、短時間での有意義な話し合いをすることができているが、欠席者に対してのフォローアップの体制が確実ではない。また、リーダー会議のみで議論される情報が多く、学生スタッフ全体に伝わってこないという声が聞かれる。定例会の開催やメールマガジンなどを利用したスタッフ全体で情報の共有ができる体制作りが求められている。

●学業・他の活動とのバランス

学生である以上、授業への参加は最優先事項である。また学友会や部活・サークル活動など、学業や他の学内活動とのバランスや住み分けを考えながらOCP学生スタッフの活動を進めていく必要がある。しかし一方で、ミーティングの出席率が悪い、学生スタッフ全員が一同に会する機会が少ないなど慢性的な問題も抱えている。

●学生・教職員との関わり

OCP学生スタッフの存在と活動は、未だ大学内全体に深く知れ渡っているわけではない。大学内での認知度を上げていくと共に、より多くの学生に参加を呼びかけ、新しい学生スタッフとなる後輩の育成も必要とされる。

また活動をしていく上で、自分の活動とは一見関係がないと思っていた授業や教員との関わりが大きな手助けとなった、という声も聞かれている。OCPを通して、より多くの学生と教員が関わり持てるように、情報を整理し、授業と活動分野との関係を体系化していくことも必要であろう。

●OCP推進室との関わり

OCPプログラムの推進に当たっては、現在、社会力コーディネーターが常駐しているOCP推進室と、教員の連絡会議としてのOCP推進室会議の二つが大きな役割を担っている。OCP推進室では主に活動相談や活動説明会また、受け入れ団体との面談が行われている。学生が気軽に訪れることができ、社会力コーディネーターと直接話しをしながら活動の相談や、また、大学生活での不安や悩みまでも相談することができる風通しのよい場所となっている。しかし、社会コーディネーターの対応にも限界があり、学生一人ひとりにきめ細かい対応をしていくには学生スタッフのサポートが欠かせないであろう。今後、社会力コーディネーターと共に学生スタッフが常駐し、相談会などを行う機会を増やしてい

くことにより、更に学生が立ち寄りやすく、学生の目線での情報を提供できる場となることが期待される。

また、OCP推進室会議に対して、OCP学生スタッフは今まで以上に密な連絡を取っていく必要がある。OCP推進室会議に学生スタッフの考えがより明確に伝わるように、日頃から活動記録の作成や情報の整理を行い、問題点や改善点の提案に際しては、きちんとした調査と裏付けを行う必要がある。

●地域との関わり

OCPがつくば市をキャンパスとした活動である以上、OCP学生スタッフも活動を学内に限定せず、積極的に地域と関わりをもっていく必要がある。様々な学外活動を通して、学生の言葉でOCPの意義を地域に伝えていきたい。またNPO法人つくば市市民活動推進機構(つくばEPO)⁹⁾が運営する「つくば市市民活動センター」の有効的な活用など、OCP学生スタッフが積極的に学外活動を行うことで、つくば市という市民活動が盛んな社会環境のなかで活動ができていくことが望ましい。

OCP学生スタッフにとってこの一年間は思考錯誤の連続であった。成果がなかなか出ないことに焦り、いつもがき苦しんでいたように思う。そして学生スタッフの関心がOCPの枠を飛び越えて、制度やカリキュラムの改善・改良など大学の本質的な部分に向き始め、自分たちの本来の役割を見失ってしまったこともある。しかし、このように一年間の活動をまとめてみると学生スタッフ取り組みは、はっきりとした成果を出していることを確かめることができた。

OCPのため、学生のための活動を、とあまり肩に力を入れすぎずに、まずは学生スタッフ自身が楽しく有意義に活動を行い、そ

して、その姿が他の学生に響いていくことで OCP の発展につながっていくようでありたい。

注

- 1) 詳細は、西機・武田 (2007)、吉田・豊田・金久保 (2007)
- 2) OCP プログラム推進のため OCP の授業のやり方や内容の改善などについて協議し、実行することを目的とした教員組織である。詳細は、吉田・豊田・金久保 (2007)
- 3) 学内の教職員だけでは難しい学外の団体との交渉や、ネットワークづくりをするコーディネーターである。OCP 推進室に常駐している。詳細は、西機・武田 (2007)
- 4) OCP プログラムでは、実践科目 A (1 年生)、実践科目 B (2 年生)、実践科目 C (3 年生) として 1 年次から 3 年次まで段階的に社会参加活動を行う必修科目の授業がある。詳細は、吉田・豊田・金久保 (2007)
- 5) リーダー会議を中心に、全体のスーパーバイザーとして、OCP 推進室員の宮寺見夫教授も参加している。
- 6) 実践科目で活動を行う学生を受け入れている団体、また受け入れの体制がある団体、詳細は、西機・武田 (2007)
- 7) プレーンストーミング (brain streaming) 法の略。他人の意見を批判しない、自由奔放に意見を出す、質より量を重視する、連想と結合 (他人の意見から連想を働かせ、自分の意見を加え新しい意見とする。)

を基本原則として、グループで自由に意見を出し合い、あるテーマに関する多様な意見を抽出する発想支援法である。

- 8) 文化人類学者川喜田二郎が考案した創造性開発 (または創造的問題解決) の手法である。考案者のイニシャルに因んで KJ 法とされる。意見やデータをカードに記述し、カードをグループごとにまとめて、図解などを行い、論理的に整序して問題解決の道筋を明らかにしていくための手法である。
- 9) つくば市民活動推進機構と筑波学院大学は平成 18 年 5 月に連携協定を結んでいる。

参考文献

- 西機 真・武田直樹 (2007) 「筑波学院大学 オフ・キャンパス・プログラムにおける社会力コーディネーターの試み」『筑波学院大学紀要』第 2 集 pp.195~204 筑波学院大学
- 吉田真澄・豊田一男・金久保紀子 (2007) 「オフ・キャンパス・プログラム (Off Campus Program) のあらまし」『筑波学院大学紀要』第 2 集 pp.205~213 筑波学院大学

付記

本稿は、OCP 学生スタッフ各リーダーの意見を執筆者がまとめたものである。文責はすべて執筆者にある。この場を借りて、平成 18 年度、19 年度の OCP の活動に協力していただいたすべての皆様に感謝を申し上げたい。

3、今後、OCP でどんなことをプログラムとして取り入れてほしいですか？

ex:自分は〇〇が得意なので、それを生かせるプログラムがあるといい。

××に興味があるので、××の分野のプログラムを作ってほしい。など

[]

4、実践科目を行う上で不安なことはなんですか？

- ①交通費などの出費 ②活動時間がほかの授業と重なる ③対人関係 ④不安はない
⑤その他()

5、筑波学院大学の OCP の活動の様子が常陽新聞に掲載されていることを知っていますか？

- ①知っている ②知らない

6、OCP・実践科目について自由な意見をお聞かせください。

A、OCP・実践科目の良いところは何だと思えますか？

[]

B、OCP・実践科目に足りないものは何だと思えますか？

[]

C、学生スタッフに何を期待していますか？何をしてほしいですか？

[]

D、OCP 推進室・社会力コーディネーターに何を求めますか？不満などありましたらどうぞ！

[]

ご協力ありがとうございました。

みなさんの意見をもとに、より活動しやすい OCP を目指します。

筑波学院大学 OCP 学生スタッフ